

第41回 京町家まちづくりファンド委員会 議事録

日 時：平成31年4月23日（火）午前10時から12時まで

場 所：京都市景観・まちづくりセンター ワークショップルーム2

（以下、敬称略）

出席委員：大場修、島田昭彦、田房夏波、深尾昌峰、中山雅永

事務局：宮川、梶山、西井、小出、永田、島垣／記録

配布資料：次第、委員名簿、座席表

資料1 2019年度京町家まちづくりファンド改修助成事業募集要項（案）

資料2 京町家まちづくりファンド改修助成事業実施要綱

資料3 京町家まちづくりファンドの普及の取組方針（案）

資料4 平成30年度京町家まちづくりファンド事業報告

専務理事より開催挨拶

本日はご多忙な中、京町家まちづくりファンド委員会にご出席賜り御礼申し上げます。このファンド委員会の事務局をしている公益財団法人京都市景観・まちづくりセンターは、21年前に京都市の外郭団体として発足した。京町家まちづくりファンドは14年前に、京町家が減っていく状況を憂いた関東の篤志家の方からのご寄附と、京都市、国からの支援をもとに設立し、京町家の保全を応援する方々のご寄付で運営されている。

今年度から京町家まちづくりファンド事業のあり方を大きく変えることを考えており、改修助成事業の対象町家を変更する。昨年度から京都市の京町家を助成する制度が整ってきている環境をふまえ、京町家まちづくりファンドで行う限られた支援においては、パイロット的なまちづくり活動との関連性の深い京町家等の改修に助成することとする。

次に、ファンド委員会の委員構成を変更することとした。京町家の改修を建築的に審査し助言いただくことに加えて、情報発信と寄附促進の観点から新たなファンド委員の経験と学識により議論し、助言いただきたいと考えている。京町家まちづくりファンドを多くの一般市民の方に知ってもらうための、また寄附促進に向けてご意見をうかがいたい。

自己紹介

大場氏

島田氏

田房氏

深尾氏

中山氏

委員長選出

委員長：大場委員

副委員長：島田委員

◆事務局よりファンドの概要説明

委員等 A：スライドを見て改めて、かなりの取り組みをされていて素晴らしいと思ったが、なかなかそれが伝わっていないのかなと思った。作る力を 1 としたら、5 倍の力で伝えないといろいろなことが動かない。せっかくこれだけのことをされている中で、私に期待されているのはこれをどのように伝えて、伝える力を 5 倍かけるか、そういうところだなと思いつつ、聞いていた。伝える力を 5 倍というのは、単にメディアに出た、ということだけではこの 21 世紀は難しく、多様な仕掛けを施していくことで、ロコミが発生する。そして外国や京都以外の方に興味を持ってもらうために、情報の種を撒き続けなければならない。現在は、取組の実施だけに手一杯で、発信までできていないので、その情報発信がこれからの取り組みの本質である。自分の周りでも町家に興味を持っている方は多くいらして、大企業の方で町家を買いたい方とか、海外の投資家で、日本酒の普及のために活動されている方もいる。今後は情報を誰にどのように伝えていくのか、このテーマと情報が欲しい人のていねいな繋ぎ合わせがあると、この運動が一気に加速する印象を受けた。個々というより、全体で加速していければよいと思う。私自身で何ができるかというところでいくと、インターネットで、20~30 代の人に町家に興味を持ってもらったり、世界から来てもらったり等が考えられる。その方法は追々考えていきたい。

議 長：私が期待した通りの話であった。

委員等 A：早速、明日、海外の方が京都に来る予定があり、その方にこういうものを見せると、興味や関心があると思う。日本に全く接点がなかった人が、日本のアニメで日本酒を知り、日本酒が何かを調べていくうちに、今やその国の日本酒のカリスマとなっているという例があるので、何かきっかけを与えるのが大切である。富裕層や、町家に興味を持ってくれそうな人にていねいに上手く情報を伝えていくきっかけ作りを意識している。外国の方が来られた時に何軒か町家をお見せしようと思う。酒×町家とか、何か自分と接点があるところから、興味関心が扇型に広がっていくというのが人間心理だと思うので、明日来られる際に、すぐに対応する。

委員等 B：私も同じ感想を持った。もっと多くの方に知ってもらうべきで、これだけ地道に実施されてこられて非常にバリューが高いと思った。投資の仕事をしている中でいうと、今までの利回りモデルではなく、特に社会的投資という社会的収益を目指す投資家は機関投資家も含めると、かなり意識が高まってきている。一方で、ハゲタカファンド的な方たちも当然いるが、寄附モデルだけではない社会的投資モデルみたいなものを作る、お手伝いができるかと思う。当然、個人を中心に寄付額を高めていくのもまだ可能である。このバリュー感であれば、10 倍 20 倍に増やしていくのはそれほど難しくはないと思う。一方で、東京の投資家を中心に利回り中心のお金も流入してきて、それが意味でファッションとしての京都に上書き保存されている実情がある。町家のリノベーションも、本来の文脈の中でもう少しきちんと改修されたらいいところ

が、壊されていく。用済みになればビルに建て替えというのではない投資を、ローカルでどう手綱を持っておくのかが、実はすごく大事なことであると思う。そういう意味で、お金を出したい人達や、京都が京都であり続けて欲しいと思っている人たちがかなりいるわけで、そのような多様な資金をローカルがマネージメントする、そういう仕組みづくりをやっていく、資金を出したいという人達がきちんとそれを運用するモデルみたいなものをお手伝いができるのではないかと思う。

あとは、素朴な質問として、今のまちセンはどこに大きな課題感を持っているのか。ファンドとして入口の寄付金の課題が大きいのか、それとも出口の案件、具体的に改修する案件に繋げていくところの課題のほうが大きいのか。どちらに寄っているのかわかれば、我々も考えていく道筋の整理がしやすい。

委員等 A：どちらに軸足を置くかで取組が変わる、ビジネスでもよく「選択」と「集中」という言葉があり、やはりどこに力を置くかということで変わる。たとえばサロン（携わったカフェ）が 10 年間流行ったのも、やはりキーワードがあり、お茶をもっと日常的なものに、すなわち普段家でお茶を飲む、ペットボトルで買うという日常的にやっていることから、外にお茶を飲みに行くということを目指して、スターバックスの向かいに出店した。コーヒーを飲む 20~30 代の人が、コーヒーではなく、日本の美味しいお茶を楽しむ、京都で楽しめる、という自分たちの言葉が市場に響いた結果、来客を促すきっかけとなった。

まちづくりファンドの戦略として、今回の委員の刷新だとするならば、何かスローガンを決めて今年はこちらに集中する、発信に集中するというように決めるとよい。そうすることで、これらの事例をもっと活用でき、東京の 30~50 代の富裕層の方々向けの、小口で投資できるような町家まちづくりファンド作りということに落とし込みができるかもしれない。突飛な難しいもの、ハードルが高いものではない、いくつかのアイデアを、興味がある方々へ情報を届け切れていないというのが、現状での課題だと思う。

議 長：事務局の方から何かあるか。

専務理事：いろいろなご意見をいただき感謝申し上げます。実は昨年まちづくりファンドをどのように変えていくか、という議論の中で、いろいろな思い付き的な議論があった。たとえば、今残っている 1 億円で町家を 1 軒買って、それを研修施設とかそういう教育施設に使えないかと言うような議論もあり、また一方では、年に 400 万円程度の利子も含めるのであれば、その 400 万円の予算でやっていけば、ずっとファンドは続けられる、というような意見もあった。しかし事務局としてはファンドを続けるのが全く目的ではなく、何のためにこれをやるかと言えば、きれいごとであれば、現在 4 万軒あるという町家が少しでも残るようにお手伝いしたいが、ただ 4 万軒の町家の内では数軒しかお手伝いできないわけで、如何にこのファンドの財産を活かしていくかということで、昨年さまざまな議論をおこなった。今日、後程お諮りする議案については、ある意味折衷案的なものであるが、今までの助成の方向とは少し変えていこうと

思っている。皆さんのご指摘どおり、ではファンドの着地点は何か、そういうそもそも論はあるようで無い。極端に言えば、2年でファンドを解散するくらい集中的に行うやり方もあるので、そういうことも含めて、色んなことをご提案とかアドバイスしていただきたい。

議長：ファンド事業を13年間続けてきて、助成事業の数も85件あり、改修助成も建築的なレベルの話で、かなり精度の高い質の高い改修事業をやっている。一方、文化財の町家については、文化財としての保存改修という制度があるわけで、一般の町家を対象とした改修助成制度は、まちづくりファンドが相当高いレベルで、他の改修事業にも影響を与えている、そういう技術的なレベルでの蓄積と、人づくりネットワークづくりのようなソフトな取り組みもされてきて、かなり京町家まちづくりファンドとして、当初の目標にかなり近いところまできているのではないかと思う。そして、指摘どおり、それが世の中に出ていない、というところが共通の課題で40回までの委員会でもあった。これまでの蓄積も含めてどのように世の中に出していくかというのが第一義的な思いである。まずはそういう仕組み作りをイメージして新しい全体像を共有できるような議論をしたい。今日は非常に有意義なご意見がいただけて、しかも5倍必要だという所はなるほどと思った。

委員等C：私もこんなにいろんな取り組みがと驚いた。先程の委員等Bと重なるかもしれないが、今後発信をしていく目的がどこになっていくのかという所は素朴に疑問に感じた。たとえば一般の市民への発信に関しても、何を目的に一般の市民に発信していくのか、少しでも市民の方に寄付していただくのが目的なのか、町家がなくなっていくということに関して啓蒙と危機感を醸成していきたいということなのか、それがどう保全に繋がっていくのか……一般の方に、何を目的に発信していくのだろうかというところを絞り、明確に目的を持ったうえで設計をしていく必要があるのではと感じた。

私たちが日本の伝統を広く一般の方に伝えたい、伝統に目を向けていただきたいという想いで発信を続けているが、それだけではふわっとして、とにかく何となく知っていただくというだけでは着地点が見えない。何かを発信して知っていただいた後に、ではその後どんな行動に移せばいいのかという所がなかなか見えないと、アクションや成果に繋がらないと思う。私たちが普段発信をするときに、ただ知っていただくという所で終わらないよう、例えば出産のお祝いとして陶磁器や漆器を贈っていたり、実際に暮らしの中に伝統を取り入れるにはこんな方法がありますよといった提案をしたり、情報の受け手が行動に移せるような発信を意識的に行っている。

町家の問題も、大型町家の消失のニュースが出てくる中で一般の方もすごく関心を持っていると思うが、SNS等で一般の方の反応を見ていて感じるのは、「なんでなくなっていくのだろう」とか「何でもっと守ってくれないのだ」とか「なんで何もしないのだ」という熱い思いは出てくるものの、では具体的に何をすれば実際にその方々の思いが繋がって町家を守ることになるのかという所が、一般の方にとっては分からない、何をしたいのか選択肢が見えないのではと感じている。

あとは町家の持ち主の方や借り主の事業者の方が、どのような活用をしていこうと考

えているのかという点も含めて、どの案件にお金を投資していくか検討できると良いのかなと感じた。これまで京町家まちづくりファンドでは、建築的に非常に価値の高いものを残していくということで色々取り組んでこられたと思うが、活用の方法はこれから考えていくという事例もあったということで、修繕後の活用方法にも目を向けられればと思う。一回修繕して終わりということではなくて、ここから何十年か先にもまた修繕の機会がずっと続いていく、それを継承していくということだと思うので、投資をして改修をすることで、その後何か利益を生み出す取り組みに繋がっていく、もしくは寄付が集まるような活用が生まれるような案件に優先してお金を回していくことができるよ。ずっと支援し続けないと改修・維持できないということではなく、一旦ファンドからの投資で改修した町家がきちんと自分たちの力、町家の力でお金を生み出せるようになり、また続けて投資ができる状態になるといいのではないかな。

委員等D：伝える先、ターゲットをどこに置くのかということを考えていて、インカムを対象にして言っていくのか、助成の対象に対して言っていくのか。アウトプットの対象にしても、対象とする物件に対してのアピールをしていくのか、使ってもらう人に対してアピールをしていくのか、いろいろな対象があるのかなと思って聞いていた。話を聞いていて情報の発信の仕方思い出した。20年ほど前に国のいろいろな事業をさせていただいたときに、当然発言されているのは東京の霞が関の中央の官僚の方でその立場で話をされている。色んな環境の取り組みを京都でやっていると説明をする際に、京都新聞の切り抜きやKBSのニュースを持って行って説明するが、東京の方々からすると効果的ではなく、KBSで毎日放送されるよりも、東京の夕方のニュースで少し流れるほうがずっとインパクトあるということをお話されていた。情報の発信のターゲットをどこにするかということをしっかり決めたいうえで流していくことが大事かなと考えた。ただ情報の発信のターゲットをどこにするかということの大前提としてまず、京町家まちづくりファンドをどういった形で活かしていくのかという所を意見すればいいのかと考えている。ひとつその前提として、町家保全については、私が行政の立場なのでちょっとPRさせていただくとやはりいろんな助成の制度がある。宮川専務理事からも話があったが、今回住み分けということで京町家まちづくりファンドの衣替えをし、少し変更するというのを伺った。京町家条例に基づく助成、支援制度、3条その他条例（これはコスト的な支援ではなく法的な側面からの支援）、京町家だけではないが、町家の耐震化を上げてもらうための「まちの匠」など非常に緩やかな助成制度がある。そのあたりを少し整理して住み分けも含めてアピールをしていく必要があるのかと思う。いろいろな知恵を委員の先生方からいただければと考えている。

議長：今後の京町家まちづくりファンドの方向性や、ファンドのプレゼンスを上げていくというのは大きな課題で、一回の議論で決着がつくわけではない。せっきく小さな委員会であるので、できればこの委員会の回数を増やして自由に議論できるような委員会にして続けていきたいという思いがある。

続けて議題の1番の平成31年度京町家まちづくりファンド改修助成事業について、事務局の方から説明をお願いします。

◆事務局より今年度募集要項の説明

議 長：これをお聞きした上でこの委員会では疑問点とか意見交換をさせていただきたい。最初なので質問があればどんどん出していただければと思う。

委員等C：募集要項の中に、地域コミュニティに貢献することという要件など3点あげられているが、この内容の申請の書類はどのように上がってくるのか。8月の委員会で選定するということだが、その中で実際に「助成対象の町家でこんな取り組みをしていく」とか「こういった思いで残したいと思っている」という、持ち主の方や借主の事業者の方の声をお聞きできる機会というものはあるのか。

事務局：選定の時にまず申請書を出していただくが、町家の概要とともに申請の理由についても書いていただくことになっている。もちろん書類だけではなくて事前協議をさせていただきながらどういった活動をするのかということは事務局の方で聞いていく。あと選定の際にもし希望していただければ申請者の方に実際にこちらに来ていただいてプレゼンをしていただく場も設けたいと考えている。委員のみなさまが建物等を視察したいということであれば、見ていただく予定である。

委員等D：(イ)の通り景観の修景であるが、個人的には非常に画期的な取り組みをされるなと思った。出来るだけ使いやすいものにしていただく要件として、個ではなく群に対して助成をしていこうという発想だと思うので、個への支援で許している時間的制約というものを群となるのであればもう少し時間的に緩やかにしてあげるべきではないかと考える。例えばここからここまで両側町の修景など6年越しでやるとか、もっと緩やかにするのであれば例えば10年間のスパンの中で順番にやっていくものに対して、この中のエリアで助成対象として設定し順番にやっていただくとか。画期的な取り組みだとは思っているので、そのような使いやすさの柔軟性みたいなものは工夫してもいいのかと考えている。

事務局：実際に相談を受けている中で、通り景観として修景していくにあたって、近隣の方々とまちづくり活動に向けて、まずは情報共有と勉強会から始めるという所もあるので2年というのは難しいのかと思う。今年度は無理だが来年度は申請したいという話もあるかと思うので、改修助成が終わりきる期間を少し融通していただくとか相談ベースの中で緩やかにさせていただけるとありがたい。

議 長：すごく有意義なご指摘をいただいたなと思った。2年という期間、この時間を長くするということが良いのか、もう少し違う助成の仕方というのを作り上げたほうが良いのか、時間の長短では解決しないこともある。そういう所の助成の仕方の工夫みたいなところはちょっと検討いただいたらいいのかなと思う。
それから前回までと今回とで助成の仕方で大きく違うのが、まちづくり活動の拠点となる京町家を応援していこうという所である。その説明資料を用意していただいて、

場合によってはプレゼンをお願いするというので、それを事務局で協議して、それが委員会の方に上がってくると、そういう流れもある程度作られているということである。

先ほども申したように、この委員会ではあまり細目に立ち入ってチェックしたり議論したりといったことにはならないのかと感じる。もう13年間の実績という非常に経験値の高い事業であるので、事業の内容自体はかなり完成された形で提案されているように思う。むしろ委員会としては、先ほどのファンドの方向性とか、そういった議論にどういう風に具体的に組み入れるかという所で、そのあたりを今後は、2回目以降の委員会では皆さんのお知恵をいただきたいと思う。

それでは、もう一つ協議事項を事務局の方から説明をお願いする。

◆事務局より寄附促進取組案の説明

議 長：非常に多岐にわたる内容をかいつまんでご説明いただいたという形だと思うが、まず安定収入の年間目標が1000万円ということになっているが、この辺りは皆さんどういう風な印象を持つか。従来からの寄附促進をさらに強化するということもあるかと思うが、フレーム自体を作り直していくということもこの委員会の大きな使命なのかなと思っている。そういう大きな議論をしたいと思う。

事務局からの提案を具体的にいただいているので意見交換はしておきたい。

委員等B：1000万円というのは、私はそんなに難しい数字ではないと思っており、特に個人寄付の方はたぶんもっともといけると思っている。ただ京町家まちづくりファンドへの寄附というのは分かりにくい。先ほどの通り景観修景みたいなものを打ち出して、「ここをこういう風にする」という実際のプロジェクトに参加をするという、手ごたえ感みたいな、ここを自分たちも貢献してやれるというところを具体的なものの見せ方、参加のデザインといった視点で回路を作る方が良いと思う。京町家まちづくりファンドに寄附をお願いしても、それがどう使われてどうなるかよくわからない。個人住宅としての町家改修に向けては難しい。通り景観修景のような場合は、先ほどの時間軸の話も含めて、パース等でこの通りをこのようにしたいというものが具体的に見えると、遺贈のような話も繋がりやすい。そうすると桁が変わってくる。余計なことに努力をせず、集中させるとよい。

議 長：改修事業を見せる中で寄附を集めようということで、参加型の寄附である。

委員等B：そこに、ストーリーとか、思い、キーフレーズ、言葉の力で現地の見学とかでいろんな局面で参加型にして手ごたえを実感させていくことをやっていくと継続的な寄附者になっていく。京都地域創造基金という寄附の巡回をやっているのは、「寄附をお願いします」と言うが、かなりの人から「寄附させてくれてありがとう」と言われる。そういう実感をまちづくりファンドとして持てるかどうか。寄附した人からすると「託した」という感じで、だから「寄附させてもらってありがとう」とこのファンドとして言ってもらえるかどうか、実際に言葉にしなくても寄附して良かったと思われるよう

なコミュニケーションデザインとしてこの寄付を考えることは非常に面白いことだと思う。

委員等 A : ほんとお金を出したいと思っている方は、誰のために何のためにということが明確でないで寄付しない。それが 1 万円であろうと 100 万円であろうと自分が託したお金がこうなっていくということが分かっていないと寄付はしない。現在は意味と意義というのがあまり明確ではない。払う側の人分かる仕組みができていない。例えば東京に住む 40 代のビジネスマンで「京都が大好き、そんなには行けないけれども景観が変わる、だったら 2 万円 5 万円出そう」という方は多くいると思う。でもそうという所にはまだ情報が全然届いていない。『京都まちづくりファン』がまず分母にあり、分母が多ければ多いほど分子の『ファンド』も大きくなっていく。『京町家ファンづくり』が必要である。そのための個々の取組をやっていく。京都の人に京都でやってもらうのではなく東京と世界の人に足を運んできてもらう。そういう機運醸成ができる一番いいシステムというのを考えながらこの全体のプロジェクトを今年度は進めていきたいと思う。

議長 : この事業参加型の寄付事業っていうのはぜひとも具体化したいと思う。今年からそれが実現できるかどうかは事務局にお任せするしかない。今まではどういう風に助成するかという議論とどういう風にお金を集めるかという議論の全く別のことをやってきた。

委員等 C : 外観改修助成という既存の事業については、これはこれで必要であって成果が上がっていることだと思うので、またこれとは別にプロジェクトベースで応援ができるような機会があると良いのではと思う。先ほど、助成対象を決めるときに事業者の方に話を聞く機会はあるのかと伺ったが、どういう方がこのお金を使ってやっていかれるのかというところ、「ではこの人に託そう」というところが凄く重要な判断基準になってくると感じていて、それは一般の人にとっても同じことだと思う。この既存の助成事業は外観改修に対するものであるが、もちろんお金が必要なのは外観だけではなくて、色々資金を必要とする時に、新しくやっていくプロジェクトではすべてひっくるめて町家を保全していく、「私はこういうプロジェクトがやりたくて、こういうことでお金が必要で誰かこれを応援してくれる人はいませんか」というような形で町家を使いながら活かしながら保全して繋いでいくという先進的なプロジェクトが、いくつもこの京町家まちづくりファンドから生まれてくると良いなと思う。クラウドファンディングは、主体となる方々が本当に信頼できるかどうかというところが見えづらい部分もあると思うので、京町家まちづくりファンドの方でこのプロジェクトは本当に町家を大事につないでいくために必要です、とお墨付きを与えるような形になると、町家を保全していくためのクラウドファンディング事業のイメージで運営ができるのではと思った。

委員等 A : ソーシャルインパクトという言葉に置き換えられる。すなわち、自分は東京に住んでいて京都に貢献したい、何かしたいと思っているけれど自分で大工仕事はできない、けれど寄付金で通り修景とか改修された町家に今後宿泊ができるとか、何か自分にメ

リットがあることを分かりやすく見える化して、ネットとかニュースとかで伝えていく。これまでストーリーがなくやってこられて、やってこられた内容はすごくいいのだけど個々が点在している、それを今年度はこの案件に関して、投資者と対象者とを結びつける、人とコトをどう結び付けるかに関わりを見出すという所に本質があると思う。町家というのは社会性と注目度は高いので、ニュースにはなっているけれど読んだ人がどう関われるのかそれを丁寧に結び付けてあげるような情報発信と制度設計ができれば一番よいという考えである。

委員等C：海外からの大型の投資に対する受け皿が出来ていけば良いとも思うけれども、まず日本人だけでもすごくたくさんいると思う。

委員等A：関東圏にいると思う。ターゲットを全国の人に見に来てもらって繋いでいく。少し視点を変えると、数字の桁も結果として変わってくると思う。

委員等C：これまでまちづくりファンドが大事にしてこられた外観の部分、景観の部分は、日本人にとっての「心のふるさと」だと思う。それを京都に住んでいる人だけでなく、日本中の人にとっての「心のふるさと」である京町家の景観、京都の景観を何とか守りたいという思いを日本中の方々が少しずつ持つておられるので、思いを託せる場所を作ってくれてありがたいと喜ばれると思う。

委員等A：その気持ちのスイッチをどう押せるかがポイントだと思う。

議長：今まで40回委員会をやってきているわけだが、こういう発想は出て来なかった気がする。まずはやはりプロジェクトがあって、それをきちんと紹介して、それに賛同していただいた方にお礼をするということ。そういう寄付事業の全く新しいデザインというのを今回の取り組みの中で具体化できればいいと思う。試行錯誤も含めて出来るだけ取り組んでいただきたいと思う。次回の委員会ではこの寄付事業と改修事業がセットになって提案されてくるのかと思うが、事務局の方そのあたりはいかがか。そのようになれば、今日の議論は有意義であった。

事務局：集まってきた案件の中で何かプロジェクトができるようなことができれば結び付けていくという柔軟な対応をさせていただければと思う。

委員等A：20世紀型のやり方と21世紀型のやり方に分けられ、ここで議論したのは21世紀型の新しいやり方である。それを推進していけば新しいファン層につながる。イメージをどのようにカタチに落とすか。

議長：この委員会は年に数回なので、あとは少し個別に色々お手伝いいただければありがたいと思う。今日の委員会は41回目、大変画期的な委員会だと思う。

専務理事：事務局として期待をしていた以上に目から鱗のようなお話が伺えたので本当にありがたいと思っている。それと今日は一応継続性の観点から今年度の事業はこういうことをやるとご提案させていただいたが、決して固まったものだとは思っていない。物事は変えないと今よりは良くなる。どうしても役所や第3セクターというのは変えるのが苦手な組織ではあるが、まちセンはそれに全然とらわれなくてもいいと思うの

で、例えば今日いただいたプロジェクト型というのも今年度の募集要項にかぶせれば
いいだけの様な気もするので、これからはまず個別に各委員の先生にアイデアを教
えていただくような場を設けるつもりである。委員会の回数も、今の審査対象の審査
だけの回数ではなく、ファンドの在り方の議論のような委員会の開催も考えていこう
と思っている。本日は有意義な議論をいただきお礼申し上げます。

議 長：それでは、本日の議事は全て終了する。次回の委員会は8月の開催予定とする。

(以上)